



観光地点検

奈良県立大学地域創造学部講師

岡本 健

盛んになる大学の観光教育 産学連携の最適な形とは？

近年、観光教育が盛んだ。観光立国推進基本法でも高等教育における観光人材育成充実の施策を行うことが明記され、観光学を教える大学や大学院が増加した。実践的な教育を展開する大学もあり、これを受験生向けのPRにすることも多い。

一方で地域と密接に関わる教育研究を進める大学に対する文部科学省の後押しもある。2013年度から実施された「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」である。地域を志向した教育、研究、地域貢献を進める大学への支援事業で、13年度は52件が採択された。今回とり上げる奈良県立大もその一つである。

奈良市観光振興プロジェクト

このような状況でよく見られるようになったのが産業界と大学の連携事業である。今回は、奈良県奈良市を取り上げ、産学連携のあり方について考察したい。

奈良県奈良市にある奈良県立大学は11年10月に奈良信用金庫と地域振興に関する連携協定を締結した。それに基づいて「なら観光シンポジウム」が12年8月までに3回開催され、同9月には「奈良市観光振興プロジェクト」が発足。このプロジェクトの目的は「奈良市の重要産業である『観光振興』を具体化させるべく、調査・検討を行い、実効性のある取り組みを提言すること」だ。

ここで、産学連携で陥りがちなパターンを示しておこう。すでに決まっているパッケージに学生が思いついた企画を落とし込むのがその一つだ。学生たちは、大人たちの必要から実施される産学連携事業の渦中に「良い経験になる」「学びになる」と言って放り込まれる。思いついたアイデアを元に企画プレゼンをさせられ「学生らしい斬新なアイデア」というマジックワードで評価される。あとは企業の手で商品や企画が完成し販売される。学生は当日スタッフとして無給で働き、地域の人やお客様とのふれあいが楽しめることで、良い経験になったと満足し、何かを成し遂げたような気持ちになる。これでは、教育的

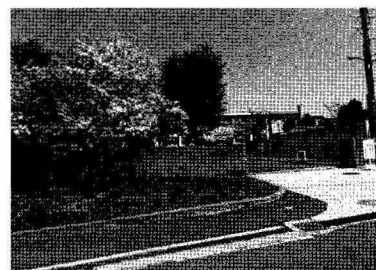
効果は低いし、連携による新たな商品開発にもつながっているとはいいがたい。

既存調査の分析と新規調査

奈良市観光プロジェクトは、前述したような形だけの連携事業とは一線を画している。

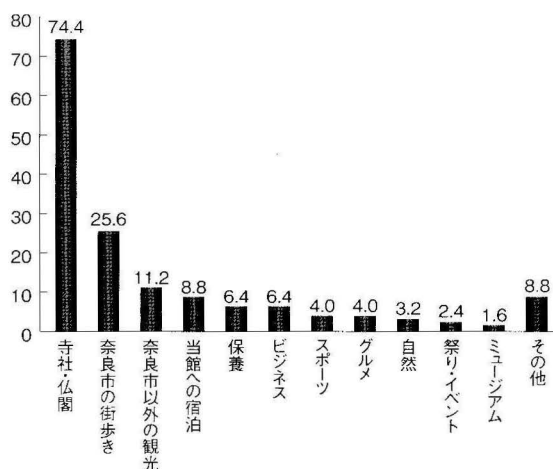
まず、奈良市観光入込客数調査報告(11年分)の分析が始められた。初めに奈良市の観光入込客数推移を確認している。10年度は平城遷都1300年で1,842万人を記録したが、その水準は継続せず、11年度には1,313万人と大きく数字を減らしたことを確認。さらに、観光庁による宿泊旅行統計調査(11年度版)の結果から、奈良の延べ宿泊客数が日本国内で46位である事実を指摘する。

次に、この現状の詳細について12年12月に2つの独自調査(宿泊施設実態調査、宿泊客実態調査)を実施。宿泊施設への調査でリピーター率や稼働率が



産学連携を進める奈良県立大学

図1 宿泊客の奈良に来た理由(n=125、単位：%)

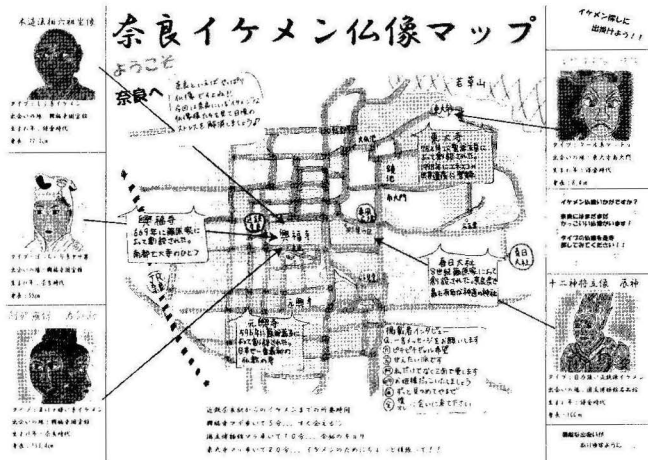


低い宿泊施設が多いことを、そして、宿泊客への調査で、奈良での宿泊理由を明らかにした(図1)。この結果を見ると、「寺社・仏閣」を挙げた宿泊客の割合が7割をこえ、「奈良市の街歩き」「奈良市以外の観光」が続くが、25.6%、11.2%と、1位との差が大きい。

これらから奈良の宿泊者数を上げるためには、誘客力のある寺社・仏閣を活用しながらも、それ以外の魅力を含んだ街歩きの促進、奈良市以外の資源の周知、あるいは、保養やスポーツ、グルメ、イベントと言った新たな価値観の提案などが必要となる。データ分析の結果を元にプロジェクトは大きく2つの取り組みを実施する。学生による「奈良イケメン仏像マップ」(図2)制作、信用金庫スタッフと学生による宿泊観光プログラム提案「奈良の過ごし方100のコンテンツ」だ。

著者は「奈良イケメン仏像マップ」の制作指導としてかわ

図2 学生目線の「奈良イケメン仏像マップ」



らせてもらった。マップ制作をきっかけにコンテンツ作成の方法やスケジュール管理の大切さ、情報をどのように見せるのかについて学生に指導する良い機会になった。信用金庫は学生がマップ作成に必要とした経費を積極的に負担してくれた。実はこの点は非常に重要である。産学連携の場面では「学生を使えば金がかからない」という思惑が透けて見えることがある。それでは良いものは生まれにくい。「ボランティアだから」と学生の責任感も弱まる。さらに、奈良県立大学からは会議に学長が出席していたことも大きい。若手教員を動員し、全てを背負わせるケースもあると聞くと、学長自ら会議に出席することで現場は動きやすくなる。信用金庫の若手スタッフや学生が現場とともに汗をかき、取り組むことができる環境が整備されていたように思う。

13年11月には第5回「なら観光シンポジウム」が開かれ、

信用金庫スタッフと学生によって取り組みについて発表がなされた。会場には多くの関係者や市民が訪れて、熱のこもった発表に聞き入っていた。発表後の反響も大きかったという。

今後のポイント

今回の取り組みはPDCAサイクルのPLANの段階だ。産学連携は時間がかかる。今回のプロジェクトに奈良信用金庫から参加する植木香氏は言う。「分析・提言はあくまで机上のものです。実行して初めてプロジェクトが成り立ちます。このプロジェクトはこれから本番」

産学連携の魅力は、多様なアクターがそれぞれの特色を生かして協働し、創造的な取り組みを行えること、そして、その過程で協力関係を築いていけることである。長い助走を経て、ここからジャンプする奈良市観光振興プロジェクト。ここから何が飛び出してくるのか楽しみでならない。

